

幼稚園実習におけるドキュメンテーション型日誌導入の試み

— 大学と附属幼稚園との協働を通して —

An attempt to introduce documentation-based dailies in kindergarten practice.
— Through cooperation between a university and an affiliated kindergarten —

児童学科 Dept. of Child Studies	請川 滋大 Shigehiro Ukegawa	桑原 淳子 Junko Kumehara	吉岡 しのぶ* Shinobu Yoshioka
	加藤 寛子* Hiroko Kato	日下部 弘美* Hiromi Kusakabe	根津 知佳子 Chikako Nezu

* 日本女子大学附属豊明幼稚園

抄 録 本論文は、幼稚園の教育実習において、実習日誌の形式を変更する試みを大学と附属幼稚園との協同研究をまとめたものである。日誌の変更を試みたのは、2回目の幼稚園実習を行う大学4年生で、そのうち附属幼稚園で教育実習を行う学生7名についてのみ試験的に導入した。7名の学生たちは、実習期間の前半では時系列やエピソードを記す日誌を記し、実習の途中から保育実践中の子どもたちの写真を貼り付けエピソードを記すドキュメンテーション型日誌へ変更をした。その結果、ドキュメンテーションを通して教師との対話が生まれたことや、日誌作成に楽しく取り組めたという利点があった。一方、カメラなどの機材の活用ことや、今後すべての学生にこの方式を広げるには事前準備を丁寧に進めなくてはならないなど、新たな課題が見えた。

キーワード：幼稚園、教育実習、実習日誌、ドキュメンテーション、対話

Abstract This paper summarizes a cooperative study between a university and affiliated kindergarten in an attempt to change the format of diaries of student teachers in kindergarten. The alteration of university seniors' diary was attempted who joined a second kindergarten practice. It was introduced on a trial basis for only seven students conducting teaching practice at the affiliated kindergarten. The seven students kept a chronological and episodic diary in the first half of their teaching practice and changed to a documentation-based in mid-practice, in which they pasted photos of children and wrote about episodes. As a result, they enjoyed writing diaries, which led to dialogues with teachers through documentation. On the other hand, new issues were identified, such as the utilization of cameras and other equipment, and the elaborate preparation required to expand this method to all students in the future.

Keywords: Kindergarten, Teaching Practice, Diaries of student teacher, Documentation, Dialogue

【はじめに・研究の目的】（請川）

本学児童学科では、3年次の秋に2週間、4年次の春に3週間の幼稚園での教育実習を行っている。学生たちは緊張した面持ちで実習に臨むが、実際に

実習が始まると実習日誌を書くことに苦勞する学生が多いということが分かる。よく学生から聞かれる話としては、「日誌を書くのに時間がかかり寝る時間が短くなる」、「一度寝てから、夜中に起きて日誌を書くようにしている」ということである。中には、

「前日に指導を受けた日誌の修正に時間がかかってしまい、新たに記す日誌が予定通りに提出できなかった」という者もいた。これらについて、実習生の努力不足、怠慢と判断するのは簡単なことであるが、そもそも一晩で行うにはとても辛い課題を課しているのではないかとということも考えられる。

桑原（2009）は、すでに1度実習を終えた短期大学2年生を対象に実習についての質問紙調査を行っている。3週間の保育所実習の中で、風邪をひいた学生が53%、疲労感を感じていた学生が20%いたことを報告している。そして、子どもは可愛いと感じながらも、自分の体力のなさや、保育者になるにあたって自信を失ったなどという感想を持つ学生がいたことも記されている。また宮平ら（2001）も、保育士養成校の2年生を対象に施設実習や保育所実習の日誌について調査を行っている。調査結果からは、保育所実習の日誌を書くのにかかった時間として最も多い人数だったが2～3時間で調査者全体の45.8%、中には5～6時間という学生も8.3%存在した。これらの結果からは、保育者になる夢を抱いて実習に参加しても、疲労感を感じたり、体調を崩すことが多く、日誌にかかる時間も想像以上に長いという様子が垣間見える。実際に本学でも、実習へ行った後に保育者になるのを諦める学生が例年存在し、幼稚園の教職課程を辞退するという事に直面している。

本学の幼稚園実習においてはこれまで、手書きで記す実習日誌を配布し、主に時系列やエピソードで日誌を記すという形式をとってきた。ただ、一部の幼稚園では園で取り組んでいるドキュメンテーション型の日誌を実習生にも導入しているところがあり、それらの園へ実習に行った学生に話を聞くと、「写真を活用するので楽しみながら日誌を書くことができた」という感想が聞かれた。「ドキュメンテーション」とは、本来は記録を意味する言葉であるが、保育の分野では「写真を効果的に用いた記録」（請川ら、2016）のことを表す。今回、本学附属豊明幼稚園の協力を得て、4年次の2回目の教育実習において、ドキュメンテーション型の日誌を試験的に導入することとした。それは、学生の日誌記載に伴う負担を減らすことと、写真を活用することでより具体的に子どもの活動場面を想起できるのではないかとということ。そして、園の指導教員側も、ドキュメンテーション型の日誌だと子どもの姿を思い

出しながら楽しく指導ができるのではないかと考えたことによる。

本研究では、ドキュメンテーション型日誌を導入することが実習生や指導教員側にどのように受け止められたかについて検討することを目的とする。具体的には、養成校側である児童学科の桑原が学生に実習前のアンケート調査を行い、実習後には根津が今回の取り組みについてのふり返りを学生に聞き取りしている。一方、実習園側からは、吉岡がドキュメンテーション型日誌を取り入れるにあたっての教員側の思いについての調査、加藤が実際に学生を指導してみたの省察を、日下部が実習後に改めて教員に今回の取り組みについてアンケート調査を行っている。

【実習日誌について学生へのアンケート調査】

（桑原）

本学家政学部児童学科の2022年度4年次学生に、3年次の幼稚園教育実習日誌についてアンケート調査を実施した。

（1）アンケート調査概要

1. 対象：家政学部児童学科4年次学生63名。この学生たちは3年次に2週間の教育実習を私立幼稚園にて行っている。
2. 調査内容：学習管理システムへの入力によるweb調査を行った。
3. 質問内容：
 - ① 3年次の教育実習の際、実習日誌の毎日書く記録の部分はどのようなスタイルであったか。下記から該当するものをすべて選ぶ形式。
 - エピソード型（保育中のエピソードから考察を書く）
 - 時系列型（時間、幼児の活動、保育者の指導・援助、考察を書く）
 - ドキュメンテーション型（写真を切り貼りなどしてエピソードを書く）
 - その他
 - ② 3年次の実習日誌の記述を通してどういった力が育ったと思うか
 - ③ 3年次の実習日誌において苦勞した部分はどこか
 - ②及び③については、自由記述とした。

(2) 結果と考察

1. 実習日誌に用いられる記録の形式について

表1にあるように、実習日誌の形式としてはエピソード型、時系列型、もしくはその併用がほとんどで、ドキュメンテーション型を体験したのは3名のみであり、教育実習の記録において、ドキュメンテーション型を導入している園は少ないことが分かる。

表1 実日誌の記録の形式

日誌の形式	人数
エピソード型	11
時系列型	26
ドキュメンテーション型	2
エピソード型+時系列型	23
時系列型+ドキュメンテーション型	1

2. 「実習日誌の記録を通して育った力」について

表2は、学生の回答を項目ごとにまとめ、実習日

誌の形式ごとに学生が実習日誌を通して育ったと感じている内容を人数で示したものである。どの形式においても、「観察力、考察力」が育ったと感じている学生が多いが、それぞれ独自の考察の特徴があることが記述からも読み取れる。エピソード型においては、「子どもの立場から深く考えることができた」、時系列型においては、「一日の流れをつかむことができた」「保育の様子を文章化する力がついた」という記述が特徴的である。時系列とエピソード型の併用においてはその両方が挙げられており、記録の形式を複数経験する効果も見られる。ドキュメンテーション型、ドキュメンテーション型と時系列型の併用においては、考察力の他、「写真の使用により日誌を書く際に保育の場면을鮮明に思い出すことができた」「保育の中で感じた疑問を忘れることなく質問でき、疑問を解決することができた」など、保育を思い出しやすいメリットについての記載が見られた。

表2 実習日誌の記述を通して育ったと思う力（複数回答）

	エピソード型	時系列型	ドキュメンテーション型	エピソード型 時系列型	時系列型 ドキュメンテーション型
観察力	4	13		7	
考察力	3	11		7	1
子どもの立場から保育を深く考える力	5			5	
客観的に見る力	1	2		2	
保育を振り返る力	2	1		3	
一日の保育の流れをつかむ力		6		3	
保育の様子を文章化する力	1	6		8	
視野の広がり、全体を把握する力	1	1			
その他		1	2	4	1

3. 「実習日誌において苦労したこと」

表3から表6は、実習日誌の形式ごとに、「実習日誌において苦労したこと」をまとめたものである。

表3 苦労したこと（エピソード型）

項目	人数
手書きであること	3
保育の場면을思い出すこと	4
保育の様子や考察を文章化すること	2
時間帯ごとの保育者の指導をつかめなかった	1
子どもの名前を覚えて書くこと	2
エピソード記録に慣れること	2
その他	1

表4 苦労したこと（時系列型）

項目	人数
手書きであること	4
保育の場면을思い出すこと	5
文章化すること	4
時系列をどこまで細かく書くか	8
時系列なのでエピソードが書けない	2
主観を交えず事実を書くこと	2
保育者の意図やねらいを考えること	1
メモを細かくとること	4
その他	5

表5 苦労したこと（エピソード型+時系列型）

項目	人数
手書きであること	7
保育の場面を思い出すこと	5
文章化すること	1
時系列をどこまで細かく書くか	1
書く量の多さと時間の確保	6
保育者の意図やねらいを考えること	4
その他	4

表6 苦労したこと（ドキュメンテーション型（時系列型併用含））

項目	人数
考察すること	1
写真を含めたレイアウトに時間がかかる	1
慣れるまで時間がかかる	1

エピソード型、時系列型、またその併用型に共通して「手書きであること」(15名)が挙げられており、修正の困難さ、時間を要するための疲れや睡眠不足などが負担感として挙げられている。次に「保育場面を思い出すこと」(12名)の難しさを挙げている学生が続く。ドキュメンテーション型（時系列型との併用含）にはその記述はなく、写真は保育を思い返す手掛かりとなっている。「書くこと自体は辛くはなかったが慣れるまでには時間がかかった」「レイアウトを考えるのに少し時間がかかった」などの記述があり、ドキュメンテーション記録を作成する試行錯誤に一定の時間を要したことが伺われるが、他の形式に比較すると負担感は少なかったことが読み取れる。

【今回の取り組みを実施する前の現場教員の意見及び問題意識】（吉岡）

(1) これまでの<エピソード型>日誌（以下、旧・日誌）を使った指導について

旧・日誌では言葉や文章だけで伝えることの難しさ、状況説明が多くなり、実習生が述べたいことや考察が掴みにくい、という問題点があった。書くことが苦手な実習生に対しては文章の書き方から指導したり、読み取りにくい部分について再度話を聞き指導する必要があったり、実習生にとっても教員にとっても多くの時間を要し、日誌を書くことが大きな負担、苦痛になってしまうという悪循環も見られた。

(2) <ドキュメンテーション型>日誌（以下、新・日誌）導入にあたり期待していたこと

今回の取り組みで期待していたことは次の点についてである。

- ・実習生にとって、日誌を書くことが楽しくなっほしい
 - ・写真があることで伝わりやすくなるのではないかと
 - ・写真を通して1日の保育を対話しながら振り返ることで、具体的な話ができ、話し合いの時間がより有意義なものとなること
 - ・教員にとっても子どもの新たな一面に気づく機会となりやすく、子ども理解が深められること
- 全ての実習生にとって日誌を書くことが楽しくなること、教員にとっても実習生との具体的な対話が生まれることによる子ども理解の深まりに繋がること、に対する期待が多かった。

(3) 導入するにあたって不安を感じていたこと

不安点については以下の通りである。

- ・子どもとかわる中で日誌に使用できる写真が撮れるのか
 - ・写真を撮ることに意識が向きすぎて子どもとのかわりが希薄になったり、写真先行の日誌になりしてしまうのではないかと
 - ・具体的な書き方のアドバイスや適切な指導ができるか
 - ・写真データの管理、個人情報が出してしまうのではないかと
- 初めての取り組みであり、どうなるのか想像ができないことに対する不安を感じる教員が多かった。さらに、責任実習の場面を遊びの中の一場面でも可とすることに対し適切な指導が行えるのか、を心配する教員もいた。

【実習にドキュメンテーション型日誌を取り入れてみて】（加藤）

新・日誌導入に際し、下記の点を教員間で共通理解した。

- ・日誌に使う写真は実習生と一緒に選ぶ。担任が同じ場面を撮っていた場合、そこから選んで良い。
- ・カメラは幼稚園で保管する。データは最終日に消去する。
- ・印刷したが使用しなかった写真はシュレッダーにかける。

今回（2022年6月）の実習生7名中、新・日誌（ドキュメンテーション型）の経験者が1名（加藤のクラスに配属）いた。新・日誌を開始した時期は、経験者は2日目から、その他の実習生はおおむね4日目からであった。開始時期に関しては実習生の指導者（配属されたクラスの担任）に委ねられており、実習生がクラスの様子を知り、新しい日誌の導入に前向きかどうかが目安になったと考えられる。デジタルカメラやプリンターインクは大学側（児童学科）から支給されたものを使用した。

本稿では、筆者（加藤）が担当した学生（5歳児クラス）の取り組みについて触れる。

（1）新・日誌が完成するまで

写真の選択について、所要時間は10分～20分。カメラ本体で確認できる画面では小さく、見えづらかったのでSDカードを担当のパソコンに置いて選んでいた。担当学生は毎日6～8枚程度だった。

（2）印刷

A4用紙に9枚入る写真のサイズで、3歳児組は教員室、4歳児と5歳児組は各学年のプリンターで印刷していた。

（3）レイアウト作成

担当学生はルーズリーフを日誌に見立てて使用し、見出し、写真の位置、考察など完成する全体のイメージ像を作っていた。園での作成時間はこれに充てていた。

（4）清書

レイアウトが完成していたので、家庭での清書は楽しみながらできたようである。中には園での作成時間内に清書を始める実習生もあり、各自でやりやすい方法を試しながら取り組んでいた。

（5）配慮した点

● 学びが伝わる日誌になるように

上述の「写真の選択」の際には、一緒に選んだ写真を貼るだけの日誌にならないよう、対話、話し合いの時間を十分設けた。子どもの理解がより深まる実習ノートになるよう、吹き出しを付ける際には自分の想像ではなく実際の子どもの声を拾って書くことや、実習だけでは分からない子どもたちの性格や今までの姿などを伝えていった。

● 幼稚園での作成時間

どの実習生にも、新・日誌を導入した初日は様子

を見て幼稚園での作成時間を長く設け、徐々に30分と時間を決めていくようにした。それは幼稚園内で作成し、実習生の負担を減らしながらも、区切りをつけることを学んでもらうためである。担当学生はレイアウト作成で30分、自宅での清書には1時間30分ほど費やしていた。

● 学生間での学びの場となるように

実習生同士と一緒に新・日誌を作成する時間を週3回程度作るようにした。共に作成する機会を連続して設けることで、前日作成していたものがどう仕上がったかなども見合える時間となり、互いの様子を見て学び合う姿が見られた。

（6）新たな発見

新・日誌を導入し、写真を用いることで旧・日誌よりも状況が伝わりやすくなった。また、改めて写真というツールの便利さについても気付くことができた。日誌が変わったことで新たに発見した点をまとめていく。

● 実習生との関係構築

工夫が凝らされた日誌は読んでいて楽しく、担当学生も書いていて楽しいと言っていた。実習生が明るい表情で毎日子どもたちと向き合う姿は、まだ経験の浅い私にとって保育者としての自信にも繋がっていた。互いに前向きな気持ちで日々の対話を深めていくと、次第に今まで以上に話のやりとりが弾む関係を築けたように思う。面白いと思った子どもの姿など楽しい話題だけでなく、遊びに使うものははじめから出し過ぎない様子を見て調整していることといった保育環境の大事な視点を、保育後の振り返り以外でも話すことができた。

● 写真は日誌以外にも活用できる

今までの実習生との振り返りも自分が見られていなかった場面を知る良い機会となっていたが、新・日誌を取り入れると写真があることで見えていなかった遊びをより想像しやすくなった。また、実習生の撮った写真は遊びと同様に自分が見られていない瞬間を撮影したものもあったので、子どもの新たな一面を知ったり、自分の記録にも使用したりと、子ども理解を深める上で役立つものとなった。

● 自分の癖に気付けた

担当学生の日誌を指導していると新しいまとめ方として学びになり、そこから普段自分が記録を書く時の癖に気付くことができた。私の記録はエピソード

ドや子どもの気付き、今後その遊びをどのようにしていきたいかということを中心に書いているが、実習生の日誌には図1のように遊びの説明が簡潔に入っていた。これは保護者など、その遊びに関してまだ何も知らない人が記録を見ると考えた際に大事な視点だと感じたので、今後の自分の記録に生かしていきたい。

【ドキュメンテーション型日誌導入後の教員たちへのアンケート調査から】(日下部)

実習後、指導教員9名に聞き取りを行い、アンケート項目を抽出し調査を実施した。調査対象は、教員経験年数1~8年-5名(A群)、16~25年-4名(B群)となり、経験別に2群に分けて考察をした。

<考察>

●指導者側にとっての利点

教員自身も日誌を読むことが楽しくなり、「教員

と学生との対話から子ども理解を深められた」点は高評価だった。旧・日誌以上に「自分が見ていなかった子どもの様子やつぶやきが役立った」「共に1日の保育について振り返り、明日の保育について考える機会を持つことができた」等は、写真が教員・学生の両者にとって遊び場を想起し共有する上で有効なツールであることを物語っている。以前より学生が多く語るようになったことが両者の関係性の構築を早め、対話がより一層深まる好循環を生み出している。

●経験年齢別の分析

経験年数が少ないA群では、「自分の保育と繋がり、とても共感する部分が多かった」とある。学生と話すことは自分の考えを整理することにも繋がり、同じような悩みがあることにお互いが安堵し、前向きに気持ちを切り替えられたようである。時には斬新な学生のアイデアを起用することで遊びが盛り上がり、両者にとって嬉しい場面になったことだろう。

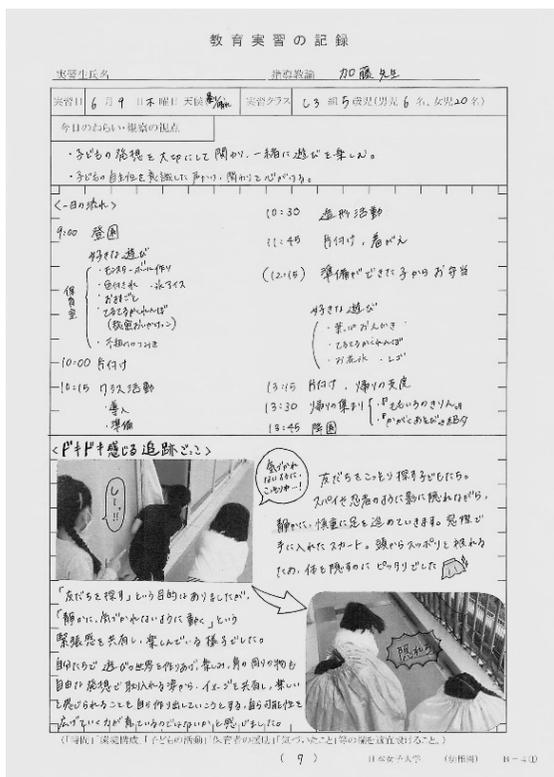


図1 担当した実習生の<ドキュメンテーション型>日誌

一方、経験年数の多い B 群では、「学生自身のセンスや個性が感じ取れ、学生に合うアドバイスの仕方を考えやすかった」とある。日誌の形態を読み解き、各学生の良さを生かしながら指導に当たろうとする心構えが窺える。

この導入を機に、責任実習案において、従来のクラス活動を主とした案ではなく、クラスの遊びの一場面でも行えるようにした（7クラス中6クラスで実施）。子どもの主体的な遊びを大切に保育実践のあり方について、実習も含めて見直したことは、本園にとって大変意味深い。

<今後の課題>

1. 設備面について

(1) 使用するプリンターの検討

「教員の PC 上で写真を見ながら振り返り→ドキュメンテーションに使用する写真を選択→各学年のプリンターで印刷」という流れだったが、Wi-Fi 環境により教員の PC 本体をプリンターのある保育室まで移動しなければならなかった。負担減のため、今後は教員室のプリンター使用へと変更したい。

(2) 予備カメラの準備

カメラが当日になって使えないという事を想定して、故障時の備えとして予備のカメラを準備しておくのが良いと感じた。

2. 指導面について

(1) 考察を深められるような指導のあり方

心動いた時に撮影する姿は見られたが、「当日のねらいとのずれ」「自分の関わりとその振り返りの記述が少ない点」が課題である。また写真映えする遊びを求めすぎる余り、個々の内面の読み取りが浅くなってしまいう危険性も感じた。

期間中は4年次であることを念頭に、①考察部分に赤線をつけるよう指示する、②対話から出てきた「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から意識的に子どもの姿を振り返るように促す、③「どうかかわってどう感じたのかを考察として書くこと」「伝えたい部分にクローズアップして写真をカットすること」等を伝える、④再度考察してほしい部分に注釈を書き込む等、具体的な指導を心がけた。さらに教員自身も主たる遊びに流されないよう、保育の本質を忘れない視点を持つ必要がある。

(2) 全ての実習における導入に向けて

ドキュメンテーション型日誌が、教員・学生共に

利点があると実感したにもかかわらず、「3年次2週間、4年次3週間どちらも導入可能か」という問いでは、A群60%、B群50%と消極的である。これは、3年次・4年次の実習のねらいが曖昧であることに起因しているのではないかと。大学と実習園で、各学年のねらいを共有し、実習園としてそれを達成するための具体的な手立てを考案していくことが本園に早急に求められている。

大学の講義でドキュメンテーション型記録について学んでほしいという声も根強くある。本園は通信教育課程からも実習生を受け入れているため、その学生指導との整合性を図っていきたい。

(3) 個々にあった記録の選択

写真を撮影することが不得手な学生もおり、技術面でのサポートも必要だった。時系列型・エピソード型・マップ型・ドキュメンテーション型等、各記録の特性を生かし、個々の能力や書きたい内容に応じて臨機応変に選択できることが一番望ましいだろう。しかし、写真は今後も保育現場で有効に活用されていくことを鑑みると、実習期間中にドキュメンテーション型を経験できるように配慮していくことも重要ではないかと思う。

<まとめ>

ドキュメンテーション型日誌の導入により、教員と学生との間に「会話」ではなく「対話」が生まれていることに着目したい。ここから翌日の保育を共にデザインしていくことで、PDCA サイクルが生まれてくる。これは保育の質の向上のために欠かせない日常的な営みである。「子どもは可愛い」、「面白い」、「不思議」、「失敗しても大丈夫」、「明日はどうする」、「一緒に考える仲間がいる」という溢れ出した思いから、学生と教員の両者が保育の魅力を再発見していき、さらに教職志望に繋がっていくと確信した試みだった。共同研究者の加藤が指摘したように、自らの保育観の広がりにも繋がるという点は、今後さらに追究していきたい。

【ドキュメンテーション型日誌に取り組んだ学生の省察】(根津)

岩田ら(2019)は、ドキュメンテーション型日誌導入により、実習生も保育者も「子どもの遊びのおもしろさ」に気づきやすくなるプロセスが見られ

ること、その「おもしろさ」をめぐる営みが協働的であるとしている。

2022年7月12日に実施した本学の教育実習事後指導でも、保育者と実習生がドキュメンテーション型日誌を介して、実践の質と日誌の内容をブラッシュアップしていった様子が報告された（下線は、根津による）。

A：まずは楽しむという視点で、といわれた。
（従来の日誌は）つつい長々と書いてしまうが、ドキュメンテーション型日誌は、状況説明が省け、子ども達の表情を捉えることができる。
B：文章が多くなる傾向があったが、他の人との活動時間をもらえたので、前回よりも日誌を書くのが楽しかった。
C：実習生や先生方と一緒にやる時間をとってもらったので、前の実習では子ども達と関われなかったが、今回はよかった。
D：遊びを発展させなくてはという思いが強すぎた。最初は、不安、次は、夢中になってしまい写真が取れなかった。先生方から至らない点をアドバイスしてもらうことで、遊ぶ時間が取れた。

何よりも実習生全員が、睡眠不足になることがなく、心身ともに余裕をもって次の日の実習に臨むことができたと振り返っている。

担任と先生と反省の時に写真を選ぶ時に、「すごい、こんなことやってたんだね、楽しそう」とか、すごい先生との会話が写真があったことで盛り上がったと思うし、そこから関心を拡げてくださったので、そういった意味でも写真があるのとならないのでは、違う部分もあるのかなと思ったりとか、やっぱり伝えやすい、けれど、伝わる写真を撮るのとかは難しいところではあったんですけど、より文字だけで書くより、楽しく、先生方も見て楽しいと言ってくれたので、そういう記録方法とかも学べたらいいなと思いました。

ところで、前述の加藤報告の学生は、理想の幼稚園について問われた授業内レポートには、「毎日の新しい出会いと経験を大切に、五感で楽しむ幼稚園」と記述している。4年次の実習中も「（五感を大切に活動を考える上で）光とか、見え方変わるか

な」と悩んだとし、「部屋の中でできることが限られているので、その中で実現するのは難しかった」が、「担任の先生もおもしろそうだね、と言ってくれたので、私自身子どもと楽しみながらできたかなって思います」と振り返っている（下線は根津による）。

当該学生は、3年次の私立幼稚園でのドキュメンテーション型日誌については、「子どもの言動に対して振り返りを考察する力が育ったと思います。振り返ることで次の日の子どもとの関わりを考えることにもつながりました」と記述していたが、今回の実習では、岩田ら（2019）が言及するように、「保育者と共に保育を考える」という関係性を構築することができたことがわかる。実習生の“観”を大切にしながら保育にかかわることを受容してもらっている＜安心感＞や＜自己肯定感＞が、教育実習における実習生の内発的動機付けや創造性の基盤になっているといっても過言ではないであろう。それは、日々の保育や子どもの育ちに対する実習生の＜責任感の芽生え＞に結びついていくのではないかと考える。

【おわりに】（請川）

実習生たちには、今回のドキュメンテーション型日誌の導入はおおむね好評であった。根津の聞き取りからは「睡眠不足にならなかった」という発言も見られ、「心身共に余裕をもって」実習を行えたのは何よりであった。これらがうまくいった一つの背景として、3年次の実習で他園にてドキュメンテーション型の日誌を経験している学生が一名おり、その学生を豊明幼稚園の加藤が上手に支えながら指導できたのが良かったのではないかと考える。当該実習生が他の実習生6名の良いモデルとなったのではないだろうか。

実習を指導した教員側にも好感触を持ってもらったようだが、学生への機材の使い方などは丁寧に指導しておく必要があると感じた。今回はドキュメンテーションそのものについて知るということで、玉川大学の田澤里喜教授に直接指導を受ける機会を持てたのが、学生たちのドキュメンテーションに対する理解を深めるうえで大変助かった。一方、具体的なドキュメンテーションの作成については、大学側の指導が十分ではなかったと反省している。我々が当たり前のように感じているデジタルカメラの使用

やデータの取り扱いについては、そもそもデジタルカメラをあまり使ったことのない学生もいたようで、その辺りは丁寧に指導を進めていかねばならない。また、実習園側と養成校側で機材の準備をどのようにするか、消耗品についてはどちらが費用負担をするかなども話をしておかないと、今後毎年取り組むということになればそれらのことが課題となるだろう。

幼稚園教育要領（2017）には、「指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすること」とある。この「一人一人のよさや可能性などを把握し」という部分について、写真や写真を活用したドキュメンテーションを用いることで、具体的な子どもの姿を思い浮かべながら記録・日誌を書いたり、教員どうして話し合えるという利点がある。今回本学として始めて取り組んだドキュメンテーション型の実習日誌であったが、今後3年次学生への導入、そして附属豊明幼稚園以外での運用も

視野に入れつつ、この度の反省点を生かしながら検討していきたい。

【文献】

- ・ 岩田恵子・大豆生田啓友・鈴木美枝子・田澤里喜・田甫綾野：「ドキュメンテーション型実習日誌の試みと課題」『論叢』玉川大学教育学部紀要, 19 2019 pp.125-140
- ・ 請川滋大・高橋健介・相馬靖明・利根川彰博・中村章啓・小林明代：「保育におけるドキュメンテーションの活用」ななみ書房 2016 p.6
- ・ 桑原逸美：「保育所実習の実態について ―学生のアンケート調査をもとに―」千葉敬愛短期大学紀要, 31 2009 pp.17-33
- ・ 宮平隆央・糸洲理子・照屋建太：「保育実習における学生の学習と生活の実態について」沖縄キリスト教短期大学紀要, 50 2021 pp.63-72
- ・ 文部科学省：幼稚園教育要領〈平成29年告示〉フレーベル館 2017

